

唐門復元工事『扁額』の巻



内庭にある唐門は、2020年(令和2年)秋に復元工事が完成しています。その一周年にあたる昨年秋、記念講演やパネル展示を行いました。

復元工事は、屋根、彫刻、建具、扁額、飾金物など、それぞれの職人技が集結し完成しています。その中で、昨年は『扁額(へんがく)』にスポットをあてました。

そして、今年の秋は第二弾、「小石川後楽園 唐門復元工事 特別授業」と題し『彫刻』を取り上げて、工事を担当された専門家お二人の講演、パネル展示を行う予定です。詳細は決まり次第、ご案内をいたしますが、唐門を知っていただき、今年の講演をさらにお楽しみいただくために、ここでは、唐門と、昨年ご紹介した『扁額』について、簡単に振り返ります。

「特別授業」に向けての、復習や予習にもお役立てください。

「唐門」ってどんな門？

小石川後楽園は江戸時代初期の寛永6年(1629年)、水戸徳川家の祖・頼房が、その中屋敷に造成を始め、二代藩主・光圀の代に完成した庭園です。

屋敷は、現在の東京ドームの辺りに位置しました。園内、東側にある屋敷の書院庭園(プライベートな日常的空間)が「内庭」、大泉水を中心とした部分が「後楽園」と呼ばれ、お客さまを“おもてなし(非日常的な空間での響応)”するためにも使われました。「唐門」は、「内庭」から「後楽園」に向かう正式な入口で、ふたつの空間を分ける境界線の役割も果たしています。

寛政6年(1794年)、太田錦城(儒者)によって書かれた『遊後楽園記并序』には、「蓋し(けだし)唐門の前は即ち侯家の前園にしてその後は即ち後楽園也。賓客の園中に遊ぶや必ず此の門より入る。吾輩の如き縦観者は則ち西門より入る。」とあります。

極彩色が施されたきらびやかな「唐門」は、賓客だけが通ることを許されました。

「唐門」と朱舜水(しゅしゅんすい)

「唐門」の創建は、江戸時代初期に来日した朱舜水による扁額があったことや、施された彫刻の時代性から寛文9年(1669年)ごろ、水戸徳川家二代藩主・光圀の時代と推定されています。

朱舜水は、明の儒学者で明が滅亡の危機に瀕した時に日本へ亡命し、長崎に渡ってきました。徳川光圀により水戸藩に招かれ、儒学や礼法、農業技術の改良などを伝えています。

光圀は朱舜水を師と仰ぎ当園を造る際にも意見を取り入れたといわれます。

光圀から園の名前を求められ、北宋時代の范仲淹(范文正とも)が書いた『岳陽樓記(かくようろうき)』の「先憂後樂(天下の憂いに先だつて憂い、天下の楽しみに後れて楽しむ)」から『後楽園』と名づけました。

日本で、明の再興を願った朱舜水ですが、願いは叶わず、83歳で亡くなるまで、光圀の元で多くの業績と影響を遺しました。

「扁額」の復元

唐門とともに焼失した扁額の復元は、大正時代の文献『後楽園畧記』に残されていた古写真(左写真)をもとに行われました。

この扁額について、元文元年(1736年)、源信興(額賀養真とも)著作の『後楽園紀事』には、「御屋形より後楽園への入口なり。匾額あり、大明朱之瑜これを書す。御細工人太田九蔵金具を以て文字を造る。」と記されています。

ここに書かれたように、額面には「後楽園」の文字と朱舜水の名、落款(らっかん)※が記されており、唐門が朱舜水と深いかかわりのあることがわかります。

唐門完成当時、朱舜水の祖国・明はすでに滅亡していましたが、扁額に書かれた名前の上には、大きく“明”と書かれています。これは、朱舜水の祖国を想う気持ちが込められていると考えられ、感慨深いものとなっています。

今回復元された扁額は、文政9年(1825年)に出版された『後楽園記』の中で坂昌成が書いた「おしばめる板にあかがねを用いて」という記述をもとに、地板には風化した形状の彫刻が施されています。

文字は銅板をタガネで加工して切り出し、銅のピンをつけて地板に固定されました。

落款って？

落款の正式名称は「落成款識(らくせいかんし)」。書画が完成したとき、自分の作品であることを示すために、作品に姓名、字号、年月、識語(揮毫の場所や状況など)、詩文などを記すことを表し、その文を款記、印章を落款印と呼びます。

